

「加越能一如」の心を

「土徳の地」という共通の土台を持つている。つまり「加越能一如」なのである。

城端別院で365日行われる朝昼のお勤めには富山県内はもちろん、七尾、金沢、小松など加越能一円の僧侶が法話をしに訪れる。

「加越能一如」は、富山と石川の人々が地域を見つめ、連携し、互いを知り、高め合うキーワードになる。その心を広げるために大きな役割を果たす土地の一つが南砺である。
(編集委員・宮本南吉)

「妙好人 千代尼」

西山さんは1月に「妙好人 千代尼」(法蔵館)という本を出した。千代尼は江戸時代の松任(現・白山市)の俳人で「朝顔やつるべ取られて もらい水」の句が有名である。

本によると、もともとは「朝顔に」だったが、千代尼は35歳ごろに「朝顔や」とした。朝顔という命と、水をくみに出られることを「おかげさま」と捉える千代尼という「いのちをいただいているもの同士」が出会い、その詠嘆が「や」に現れたという。

千代尼を育んだ松任も「土徳の地」だと西山さんは語る。

8町村が合併した南砺市には「八つの魂」があり、異なる個性を大事にしながら、根底では「一つ」である。そんな思いを「八魂一如」という連載タイトルに込めた。

12日、金沢市で「金沢・南砺ゆかりの集い」があった。田中幹夫南砺市長は、福光に疎開した板画家・棟方志功―民藝運動の柳宗悦―金沢出身の仏教哲学者鈴木大拙という師弟の流れがあることを話し「金沢と南砺の交流は広く深くな

越中・能登・加賀も同じだ。それぞれに個性があり、

「金沢・南砺ゆかりの集い」で交流する参加者

「奥能登塾」で「土徳」を語る西山さん

能登空港

奥能登塾



谷派西勝寺住職の西山郷史さん(71)。能登の民俗に詳しく、かつて市立珠洲焼資料館長を務めた人だ。

西山さんの言葉が、すっと胸に入ってきた。「『能登は優しや、土までも』と言います。土も優しうが、あれも優しい、これも優しい。その全てを包み込んだ言葉が土徳です」

南砺も能登も「土徳」の地であり、響き合う部分がある。そのことは能登の七尾市出身で城端別院輪番の亀淵卓さん(64)の言葉からも分かる。「能登からすると『一番近い別院』は城端別院なんです。能登は農民文化で南砺と相通じる」

共鳴する「土徳の地」は南砺と能登だけではない。

まとめ③

第1章 はぐくみの大地

人を育む土地の力であり、南砺市の総合戦略に「土徳のまち創造」として盛り込まれている「土徳」。それに光を当てる動きが能登でも起きている。

能登も「土徳」の地

奥能登塾は昨年6月、地域おこしに取り組む有志や石川県の呼びかけで発足した。「土徳」について講演したのは、珠洲市の真宗大

土産も販売し本各台効